

逸齋叢書

67
1

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



庭園集句集下

秋 部

五秋

秋 部
庭園集句集下
秋 部
庭園集句集下

秋 部

庭園集句集下

5306

口々中様より此片未届り系

多結しよも結しよもや温かおの白

お新々結う深

さ〜深のさ〜ゆ〜志き〜何〜うふ

乞巧奠 貸小袖 天の川

結しよ〜おの結しよ〜星の子向う乳

とれ〜何う早〜うあ〜や〜蔭のさ〜

や〜結しよ〜のさ〜か〜ぬ星の結しよ〜

貸小袖〜さ〜や〜な〜ん〜ゆ〜

乞巧奠 関のさ〜ゆ〜さ〜て〜のさ

乞巧奠 祝祭

我々〜結しよ〜次々〜なり〜ゆ〜

結しよ〜さ〜る〜世〜さ〜る〜月お

乞巧奠 乞巧の月

乞巧のさ〜さ〜出〜さ〜さ〜さ〜

結しよ〜さ〜深〜む〜さ〜る〜月

乞巧奠

新々を結しよ〜さ〜る〜し〜女の祈を命〜

相撲の古くは、時々の相撲
穂家祭 花火

八 穀 竹の葉
秋の夜も、花火の光の中
秋の夜も、花火の光の中

三日月 秋の夜も、花火の光の中
秋の夜も、花火の光の中

ついでに、人を招き入る。三日の月
秋の夜も、花火の光の中
秋の夜も、花火の光の中

名月

名月の一、夜も、花火の光の中
名月の二、夜も、花火の光の中
名月の三、夜も、花火の光の中
名月の四、夜も、花火の光の中

秋風

空城おのゝとたゞとやとく袖の露
おしとくもささるゝ風や花の露
夕ぞとくも女せぬとくやよりの露
白露やちとくもささるゝ風

所中やまゝとくも秋の風

西にたのぼる山のとくも秋作と

花の露りやとくも秋の露
まゝとくもとくも秋の露

暴風

そのつとぬそよ木をせぬと秋の風
何とくも中とくもとくも秋の風

花の露りやとくも秋の露
花の露りやとくも秋の露

花の露

赤城山中

花の露りやとくも秋の露

赤城山中懐古

夕吟く 抑々い合々や 秋の暮

白燈活士之十三回忌

遠くふらふと 秋の暮

秋号 報旨

西行勢

市中をゆく 秋の暮

山ありやまき 秋の暮

山ありやまき 秋の暮

肌會 夜會

病中

温る水も新し 秋の暮

園の戸より 秋の暮

と 秋の暮

夕夜

夕夜を 秋の暮

暮らふ 秋の暮

夕夜を 秋の暮

門人も 秋の暮

長秋の夜よ ちかき世のふしを
おぼえ 未のしづかに 地をゆく ちかき世

くち 家を出て 世をゆく ちかき世
おぼえ 未のしづかに 地をゆく ちかき世

時をゆく ちかき世 地をゆく ちかき世
おぼえ 未のしづかに 地をゆく ちかき世

待よ ちかき世の ちかき世の 月見の
おぼえ 未のしづかに 地をゆく ちかき世

懐梓

くち 家を出て 世をゆく ちかき世
おぼえ 未のしづかに 地をゆく ちかき世

懐梓 懐梓

くち 家を出て 世をゆく ちかき世
おぼえ 未のしづかに 地をゆく ちかき世

口先中 懐梓 懐梓

とんちのまじりや暮れゆく
夜ふきの翅や出ぬくこいさこ

野

野々子のさへせはるゆづり
こいさこや野のさ
後冬 雁

朝のつれづれと
つれづれとさよふさよふ
朝子 麻

五

月夜にささるる
朝のつれづれと
朝子 麻

暮 本権

朝のつれづれと
朝のつれづれと
朝のつれづれと

新島の丘さうさう白く
あまのこゝろの影く
そのまはらに咲く
相一葉 ぬ柳

とくもくはちくを相の一葉く

文月昔のあまのこゝろ

梅原繁のあまのこゝろ

梅もも熱く

西原系原歌

あまのこゝろの影く
あまのこゝろの影く
あまのこゝろの影く

鬼灯 冒糸

鬼灯の影く
鬼灯の影く

萩

萩の影く
萩の影く

十足ありけりいそや 宿の萩
女郎花

ゆき耕りたるを 宿の女郎花
いそやいそやいそやいそや

若行 萩の花

あつたきき 若行の花の生りけり
いそやいそやいそやいそや

萩 尾花

萩の宿り 宿の尾花の生りけり

萩をいそやいそやいそやいそや
いそやいそやいそやいそや

稲

いそやいそやいそやいそや
いそやいそやいそやいそや

焼末 柚味噌

焼末や 柚味噌の生りけり
いそやいそやいそやいそや

葉

さあ様々いねをやーまうやまのうた
白き葉をけしむね中の葉は
花も下戸菅蒲も下戸や葉の花
葉の葉をけしむねの葉をけしむね
花も下戸菅蒲も下戸や葉の花

内人知湖新也

未枯

うね花もさうせぬ花の小枝 灯

下土

亀形ね松

亀うねいろうやせうね花うた

荒林のねを之ねを下うね

米珠 燈様

庭まうも一もまきも木形の花

土籠 燈様

まうもらや花をけしむねの葉をけしむね

紅紫

まうもらや花をけしむねの葉をけしむね

夕雲より足のかきうぬぬめしうらうら
氣味きききききききききききききききき
陰もきききききききききききききききき
小園の日記きききききききききききききき
瓶波山

秋

秋のきききききききききききききききき
ゆきききききききききききききききき

秋

我きききききききききききききききき

既替万代替

秋のきききききききききききききききき
ゆきききききききききききききききき
月影もきききききききききききききききき

赤城山中古調

秋のきききききききききききききききき



冬之部

時

いよせのるり志きく神いよき

管の味

老の子けくくくきくく神付る

志くくくや後ケの日けり相り露

月く相りくくくくくくくくく

画啓

翁ハ山ノ妹ニヤクハクハクハク

冬 小春

新名古くをくくく方志くくく

一世常わは也小春のうきく

保

志きくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

保也 鯉 けくめく 子め 刀

くくくくくくくくくくく

保の之頃 木の方よりたてり

梅もやは枝に一重のこもりも如
生より形もさうりも久し降り花
名落花 ハツ手花

小園の名落も其も事と解るり
花うらも降りり所もハもさうも
冬草 麦草

冬草も梅も京の田舎も礼
冬草のハもさうも事と解るり
冬草も降りり所もハもさうも

麦もさうも事と解るり
本紫 落紫

梅もさうも事と解るり

池上

梅もさうも事と解るり
梅もさうも事と解るり
梅もさうも事と解るり
梅もさうも事と解るり

梅もさうも事と解るり

報恩後

向ふももさきさきなりは後風

炭竈 因炭

炭竈をんまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

備園

我々のまきまきまきまき

ふゆまらるを能くもんのか隅ふふ
まきまきまきまきまきまき

巨魁 竹桶

巨魁のまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

巨魁のまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまき

楮

井戸まきまきまきまき

路中 残夜

寛く、夜くるまきく 路中 うら

菅原 宗政

君の残夜もくらくもあき 路中外

花の匂くる風もくらく 残夜もあき

冬の夜

冬の夜もくらくく 冷月の 國 西

冬の夜もくらくく 花もくらくく 路もくらく

冬の月 雪月

下札

是も冬の不思議もくらくく 冬の月

雪もくらくく 冬の月もくらくく

冬の月もくらくく 國の不由の月

冬の月もくらくく 雪の残り

雪

雪もくらくく 雪もくらくく 雪もくらくく

雪もくらくく 雪もくらくく 雪もくらくく

雪もくらくく 雪もくらくく 雪もくらくく

雪もくらくく 雪もくらくく 雪もくらくく

怪出しく代きくはるぬ 雪の 一層
一雪のりや 初々のきり 襟いさむ
一廉せりく 中あまの 雪や 雨の門
くまきりや 櫓 折ゆ 雪の 人
改あまの 雪の 雨の 速いりり

望甲斐嶺

雪のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

望向祭

雪のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

望姜湯

小な味よく 青汁をゆ 望姜湯

折おろし 一の 新の 雪の 望姜湯

望姜湯

出のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

雪のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

雪のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

雪のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

雪のりく 雪のきり 雪のり 雪の山

はあき

不長なきを越えしうなりはあきり
風をまきぬくもあきりやふきまきり
水る

あきりの強減り月夜多あきり
水くや丘をたぬふむあきり
水きりうくす 別々 篠矢うき
詠考

あきのきり 雲のぬれをたぬく

甲

詠考より 甲 月を陸もあきりける

あきのきりも 鴨のきりや八十階はあき

お柘田

夕石のきりも 鴨のきりや

流るるのきりも 鴨のきりや

三十三才 きり

あきのきりも 鴨のきりや

身正山号

きつ時も古来忠をぬかすべし

暖冬

暖冬その妻をよもやぬくべし

暖冬その妻をよもやぬくべし

生海龍に豚

活々あふ思議うらやま

飯もやうやくいさくあす

冬玉

積りあふるきり出す

師走

暖冬うの花は沙をぬく

その縁を一口ぬく

年忌 歳暮

と一忘りやうやうやう

小杉あやうやうやう

そととりのやうやう

年忌

古くもやうやうやう

そのうちよまのさる雪降るなり
と紅芳のりな大連

けき子の縁は付たりと一の言
やうやう中体とる師は波
大くやるを解とる師はあつ沈
大くやうとる師はあつ沈
年夜とる師

一とせのちとる師はあつ沈
とる師はあつ沈とる師はあつ沈

大晦日

解之りのアスとる師はあつ沈 大二十日

新詠

十月中掛子とる師はあつ沈 笠
筋ま遠く垣越ふ冬の田つとる師
一掃のち仙雲とる師はあつ沈 四
サナ

雲よのけりよとる師はあつ沈 の山

防張お

陽炎をききしるくくくおおんく

血塗お

阿くくおまぢるる所のうらみうれ

蓬船お

あつくくうぢりく熱くく換り音

喉倉お

おくさくくくくくくく秋のくくく

音癒お

るる音也や音を粧ふままら

白音達お

侍やりのくくくくくくく

音散お

るるけくく船丘らの阿くくく

古横お

るる音のあかぼる特くくく

連声後

C

雪ふさらし月やあふ照る丸

和歌「ぬきや」ともあはれぬとて

置けしむけし物もさるるの

まゝ附添きさるるさるるぬ

十の秋の妻よさらぬ

そはさるるさるる

夕知る月やあはれ人

さるるさるるのさるるさるる

下廿六

山居月

月さるるの中にあはれり山居の

うけより外へあはれり

川子を

刀祿川の筆のさるるさるる

あはれり袖もぬれぬつらあり

恋

十の秋の妻よさらぬ

さるるさるるのさるるさるる

昭きりの堀山りやうく不空ふし

久能山

是をよの波き遠しハきくは

今切倉中

家そのく暇のゆく漸先くう家

雲崎青く風く六人日

初花やあつまつくくく一重

桶狭間

春のさめくくく各万こ家

名古屋さくく若濃ゆくく途中

月をわや阿波子の森り下きくき

雲表山中

雲をわく扶もくくく降くく乳

雲をわくくははくくくや小千扶

雲田くくくくく

帆りまらぬ海をくくくや花をく

義仲寺通松

まらぬくくくくくくくく

花つゝも 阿ふも ちりや 連ふも 是
字 詠ふ

燈をさしつゝ ちりや 阿ふも ちりや 是
宿ぬ 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや 是

阿ふも ちりや 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや
送風 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや

阿ふも ちりや 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや

青梅の ちりや 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや
名馬 鞍の 阿ふも ちりや 阿ふも ちりや

奈良良き

南切小倉点うほまり 林の若
三笠山 秋ハ花野を 歩くく
作如く 祖翁の昔々をうらむ 幸しく
あまのくくく 幸しく

古懐やこのわしりも 吟 玉掛もあ

修智山田相 序のわしりハ世々の色

あれは 幸よき 途の歩を 幸しく 歩けり

吉々めく 振のゆるりや 幸しく 歩

歩くく 花の 縁 幸しく 茶の 白い ころも

内外の 歩くく 幸しく 歩

幸しく 歩くく 幸しく 歩 出

ニ又 歩くく 歩

花も 歩くく 歩 浦の 秋

風 来 寺

之 日 月 歩くく 歩くく 歩くく 歩

秋 紫 山 中 歩くく 歩

名 月 歩くく 歩くく 歩くく 歩

650

うらやましくも海をよ出さる

乙未のしをふ於一 甲子のふら

熱海

秋の空 澄みゆく 月く 夜ふらりゆく

あまの程 長月 九月と 翌日の 夕べも

々々 夕べの 夕べと 夕べと 夕べと

夕べの 夕べと 夕べと 夕べと 夕べと

三三

慶應之丁卯年秋七月
為七回忌追福

男

信則 様



昔は清和の御時を以て
五文迄の御札を以て
あはれを教へて集り候
事は乃て文書に候

丁未七月

信別

西文書

江大付所丁内

川庵中

上毛伊佐崎

揚州庵中

武野八幡山所

久米吉富門

